

## 万華鏡

小川瑛子

澄子が、希望学園の裏庭でキャッチボールをしている兄、辰夫の所へ転がるように走ってきた。

グローブにボールをおさめ、泣き顔の澄子を見て、辰夫は

「泣くな」

と一言。肩をポンと叩く。

相次いで両親が蒸発し、八才の辰夫と六才の澄子が希望学園にやってきて、四年が経っていた。

辰夫と澄子の父親、武は腕の良い左官屋で、三十才で辰夫が生まれた頃は順調に仕事があった。

がっちりした体格、五分刈り、無口で、いつも眉の間に一本縦皺を寄せて、モクモクと働く職人だった。

母親、秋子は武の三才下の幼なじみで、切れ長の目がきらきら輝く、陽気な働き者。

二人共、早く親を亡くしたが、穏やかな暮らしが続いていた。

澄子が生まれ、借家が手狭なので、少し広い家を探しかけた頃、武の親方の属する建築会社にトラブルが発生。現場監督が給料を持ち逃げしたのだ。

あてにしていた給料が滞った事が、悪いことの始まりだった。

じわじわと世の中の好景気に陰りが出始めた。

「お父さん、今日も仕事お休み？」

秋子の声を背中であいて、武は頷くだけで左官道具の手入れを続けていた。

不況が表面化し、ゼネコンへの注文も減り、下請けの会社は大打撃だった。来る日も来る日も、これという仕事がなく、武の不機嫌が深まる。

「気晴らしにどっかへ行ってきたら？」

秋子に促されて、武が覗いたのが競馬場だった。

名人の刻った彫刻の様に、しなやかな姿のサラブレッドが疾走するのを見た武は、魂を

奪われた。おまけに、初めて買った馬券で五万三千円もの配当ももらえ、武は久し振りに晴れやかな気分を味わった。

それからの武は、暇さえあれば競馬場に出かける様になった。

相変わらず仕事は殆どなく、近所の修理を頼まれる位の事。

酔っぱらって帰る事も増えた。

「お父ちゃん、お酒いいかげんにせんと体こわすよ。競馬もほどほどにしてほしいわ。貯金もつぶしているのに」

秋子がぼやくと

「うるさい」

と、武は今迄聞いた事もない大声でどなり、とろんとした目でごろりと横になる始末。そして、とうとうある日、たしなめる秋子の頬を武はなぐってしまった。

どしんと倒れる秋子に、二人の子供はすがりつく。

「お父ちゃんのあほ」

辰夫の鼓動は早くなり、ふらふら揺れながら仁王立ちになっている武の前で、秋子と澄子をかばった。

澄子は涙目で震えている。

武は「フーツ」と息を吐いて、頭をくしゃくしゃ搔きむしりながら外へ出て行ってしまった。

そして、何日も、家に帰らない日が続いた。

秋子は思いあたる所を、必死に探したが見つからず、捜索願いも手がかりはゼロ。

三ヶ月が過ぎ、ついに秋子は七才と五才の二人を連れて、区役所の福祉の窓口を訪ねた。

「私が働かないと生活出来ません」

野球選手のように日に焼けた係長が話を聞き終えると頷き、澄子の頭を撫でた。

何回目かに訪れた時、係長は一枚の紙を見せた。

「母子生活支援施設、昔の母子寮の空きが奈良の東の方に見つかりました。保育所もありお母さんの仕事の世話もします」

秋子はほっとした顔になり、新しい生活を始める事を決意した。

奈良の大きな寺の境内に、施設「なかよし」はあり、保育園の上がそれぞれの居宅になっている。

明るいシンプルなワンルームに小さなキッチンが付いている。全部で十世帯が身を寄せあっている。

秋子はコンビニの店員の仕事が決まり、辰夫も澄子もすぐ友達が出来た。生活指導の冨子先生、保母さん、調理師のおばさん達と賑やかに集団生活が動き出した。

秋子は笑顔を絶やさず、てきぱきと働くので

「今はパートだけど、将来は常勤に」

と、店長が言うほどだ。

五月一日、「なかよし」のある寺の万部法要マンブがあり、多くの信者が続々と集まってきた。先生達も母と子も朝からウキウキしている。

広い境内に橋渡りが組まれ、仏様の金色ゴンジキの仮面、衣装で楽器を手に僧侶達が万部経を唱え、練り歩くきらびやかさだ。

出店もぎつしり並び、一口カステラ、とうもろこしの焼くにおいが漂い、おもちゃ屋、金魚すくいが子供達を誘う。

「お母ちゃん、これ何？」

澄子はおもちゃ屋で、赤と白の千代紙に巻かれた十五センチ位の筒を見つけた。

「あ、それ、万華鏡っていうねんよ。お母ちゃん 昔から大好き。ほら、覗いてごらん。色んな色の花が一ぱい見えるでしょう。ぐるり回すよ。ねー、ハラハラ動いて違う模様になる」

秋子は、はしゃいで言い、筒の覗き穴を自分の目と澄子の目に交互にあてた。

「わあーすごきれい、お母ちゃん」

澄子にその万華鏡を、秋子は自分用に黄色のを買った。

辰夫は野球のグローブを買ってもらった。

澄子はどこへ行くにも万華鏡を離さず、辰夫は暇さえあれば、「ハァー」とグローブに息を吹きかけ、磨いている。

八月、寺の木立で蝉が賑やかに鳴きだした頃、秋子のコンビニからの帰りが遅くなる事が増えた。

「ごめんごめん」

できあいのおかずを持って、辰夫と澄子に謝りながら部屋に走りこんでくる。

「私、お母ちゃんの作ったオムライス食べたかったのに。約束してたのに」

澄子は口をとがらせた。

「ハイハイ明日作るね。かんにんかんにん」

秋子はギュッと強く澄子を抱きしめ、頭に頬ずりする。

窓の外には、赤紫の夕焼けが広がっていた。

コンビニに、七月からアルバイトで勤めだした二十三才のフリーター、笹部淳が秋子の心に波紋をおこしていた。

長めの髪、細っそりした長身、手入れした眉、優しげな目の淳は、今風のかっこいい若者だ。先輩の秋子の指示を良く守り

「秋子さん、きれい」「素敵だ」と如才なく、仕事にもすぐ慣れた。

が、ふっと物思いに耽ることがある。

面倒見の良い秋子は

「どうしたん、困った事があったら何でも言って」

と悩みを聞いているうちに、淳に母性愛が屈折した感情を持ち始めた。

淳は北海道生まれだった。広くて雄大な自然の様子を、懐しそうに話した。

「美容師の資格を取ろうと都会に出てきたけれど、どうも馴染めないまま、今やフリーター

ーさ」

と投げやりに言う。

下向き加減に、神経質そうに髪を掻きあげる淳が、秋子は愛しくてたまらない。

まじめで良い人だけど、おもしろ味がなく武骨だった夫、武とは別人種の淳を支えてあげたいという思いが募る。なんとなく夫婦になった夫には恋愛感情はなかった。今初めて恋をしているのだと思った。

二人の子供を放課後保育組に入れて、秋子と淳は仕事が終わってから会えるようになった。

冴子先生に

「どうしたん？ この頃のあなた変やよ。ぴりっとしてないよ」

と言われ

「すみません、気をつけます」

秋子は目を伏せ、同じ言葉を繰り返すばかり。

九月、秋分の日。

秋子は辰夫と澄子を約束のUSJに連れて行った。

興奮して次々と乗り物に乗る二人を見ている秋子の瞳に、じんわり涙が滲んでいた。

その翌日。

「母親失格と言われるでしょうが、私を暫く自由にさせて下さい。子供達をお願いします。お金は必ず送ります。申し訳ありません。何とぞ二人の事、宜しくお頼みします」

冴子先生の机に手紙を残し、秋子は「なかよし」から姿を消してしまった。

一週間後

「元気にしてますか。きつと、そのうち帰るからね。ごめんね、ごめんね――」  
秋子から子供達に葉書が届いた。

冴子先生の膝で、澄子は万華鏡を握りしめ、辰夫はグローブを床に投げつけた。秋子がいなくなつて一年が過ぎた。子供だけを「なかよし」で預かるのは規定にないの  
で、辰夫と澄子は奈良の西はずれ、ほどろ山の麓に建つ児童養護施設「希望学園」に移つた。

親から乱暴されたり、捨てられたり、生活苦から預けられた子が二十人いる。

冴子先生は二人が不憫でたまらなかつたが、大学時代の後輩千枝子が希望学園の主任なので、泣く泣く同意した。

そうして四年前

澄子は赤と白の万華鏡を一つ握り、学園の門をくぐつた。

その大事な大事な万華鏡がこわれた……のだ。

辰夫が三十三才の千枝子先生に、澄子の涙の訳を話すと、あちこち電話をしてくれ、一つ向こうのバス停前のおもちゃ屋で、組立式の万華鏡を売っているとわかつた。

買ってきた万華鏡を組立てている辰夫の手元を覗きこんで

「兄ちゃん、これ、中味の入れ替えも出来るんやね。こわれた万華鏡に入つた色紙も入れて」

澄子の目がキラキラ踊っている。

「澄子のやつ、万華鏡、とことん好きなんやなあ。俺達をなかなか迎えにこない、うそつきの母ちゃんが懐しいんやろか――」

辰夫は鼻の奥がキューンと沁み、涙の腺につながりそうに慌てた。

説明書と首っぴきで、辰夫は細長いプラスチックミラー三枚を、とんがり屋根の様に合わせ三角錐を作る。それを丸い紙筒に入れ、片方に覗き穴を開けたふたをはめる。残つた短いアクリルケースに青、赤、黄、のちぎつた色紙を閉じ込め、そつと筒のもう一方にはめこむ。最後に澄子がいそいそと筒のまわりを、赤と白の千代紙で巻いた。

「できた」

澄子は穴に右目をあて、クルリと筒を回した。

「うわーきれい」

澄子ののこつと笑顔の弾んだ声。

「万華鏡の内世界は色とりどりの花畑に、糸でかがつた手まりに、羽根を広げた揚羽蝶に、カサコソと音をたてて変わつてゆく。」

辰夫も覗いてみた。

「きれいやなあ。一つとして同じ物がない。心がスカツとする」

澄子も満足そうにフンフンと頷いている。

あくる日、澄子は宝箱に入れたひまわりの種、うすいピンクの小さ貝、緑の石のかけらを万華鏡の種に変えた。

クルリ……と回すと

雪の結晶、ダイヤモンドが繋がった首飾り、地味な打ち上げ花火が、ハラ、パラリと姿を変えて現れる。

黄色い蛾のとまる玄関の白壁にもたれて、部屋の窓際で、寮のうす暗い廊下でも、澄子は暇さえあれば万華鏡を覗いていた。

暗い筒の中、光を吸って浮かびあがる色鮮やかな、規則正しく対照的な模様。

澄子は息をひそめて見入る。

学園も秋風のおいに包まれ始めた。

若いすすきの穂が金茶に光っている。

連休の前日

「明日の恒例の学園お楽しみ遠足は、六年生まで、山尾動物園に行きます」

朝食の時の園長先生の話に、辰夫はむくれた。

「俺達六年生も、動物園とは馬鹿にしとる」

同意を求める積りで仲間の顔を見渡した辰夫は、みんなの目が喜びで弾んでいるのに気がついた。

「象や河馬のところへ、一番に行くんや」

「わしは蛇見るぞー」

「猿がやっぱりええわ」

と、わいわいがやがや。

「大きくなってても、初めての子もいるんよ。それに私かて、動物園大好きや、さあ、辰ちゃん、いっちょようもんだげるからおいで」

千恵子先生はキックボクシングの構えをした。

バスに乗り地下鉄に乗り、動物園に着いた。

きりんの檻にしがみついている小さな子を追いたてて、千恵子先生と澄子が尾白鷺の檻

にやってきた時、辰夫は一人きり。園長先生のグループで、ずっと先を行ってる筈なのに。

「辰ちゃん 一人？」

千恵子先生の大声に

「うん」

と生返事をしただけで、辰夫の目はすぐ檻にもどる。

鷺は三羽いる。

クビッククビツと頭を動かしたかと思うと、つがいの二羽はぐわつと羽を広げ

「カツカツカツ」と鳴いて枝を移った。

バサツバサツという音に、小さな子はたじろいだ。

辰夫はさつきからじつと動かない一番大きな鷺を見続けている。

一mはある褐色の巨大な体、翼と同じ色の太いズボンをはいた様な逞しい二本の脚。黒い鉤状の爪のある鮮やかな黄色の足。つやつやした嘴も黄色。瞬きしない黒い目は射す様で、取り囲んだ金色が威厳を与えている。名前の通り、尾羽だけが白。右翼の中ほど四分の一が欠けている。

鷺は檻の外の遙か上空をみていた。

辰夫はその大鷺に吸いつけられた様に動けなくなっていた。

―もの凄くでつかい奴。らんらんとした目。なんであるなに光ってるのやろ。なんであるなに上ばかり見つめてるのや。空のどつかにある自分の本当の世界を探しているんやろか。自分の世界……か―

「兄ちゃん」

澄子の声に辰夫はハツと振り返り、その肩を抱く様にして、鷺の前に押し出した。

「見てみ、こいつは尾白鷺の王様やぞ。きつと」

辰夫がささやき、澄子はおっかなびっくりで、辰夫の腕をしっかりとつかんでいる。

帰りの地下鉄で、辰夫と澄子は並んでドアの前に立った。

電車が動き出し、駅から闇の中に入って行くと、すぐにガタンゴトンの音が少しずつずれて、二重に聞こえた。

「あっ、地下鉄がすれちがう」

澄子が鷺きの声をあげた。

違う路線の電車の窓が四つ、暗闇の中に浮かびあがった。

赤のセーター、黒の背広、白いベレー帽、黄色のコートの人の後姿が窓にはめこまれた

みたいに見えた。

―大きな万華鏡の中にいるみたい―  
と澄子が思った時、コートの人が首をねじって二人を見た。

―あつ、母ちゃん……に似ている―  
辰夫と澄子が顔を見合わせた時、むこうの電車は離れるのを厭がる様に大きく揺れてから、スーツと暗闇に入って行った。

その夜、二人は寝付かれなかった。

万部のお練り、USJの乗り物、母ちゃん的笑顔をふとんの中できれぎれに思い出していた。

秋も深まり、学園の周りのすすきの穂は綿の様になった。

澄子は背伸びして、すすきの穂先を摘んでいる。

すすきはかすかに残っている母親との思い出につながるものだった。月見の晩に一緒に川の土手へ摘みに行った様な……。

茶色の落葉が敷きつめた1m位の細い道を進むと、澄子を包みこむ様に両側から銀の波がざわざわと頭をゆする。

―トンネルや―

澄子はすすきの隙間からのぞく青い空を見上げた。日の光が差し込み、銀と青がまだらになって見える。

「あつ、これも万華鏡」

澄子は思わず地面にねころんで眺める。

その時

「おーい、澄子、どこにいるんや」

と辰夫の声。

「兄ちゃん、ここ、ここ」

返事をする

「澄子、千恵子先生が言っとった。俺らの母ちゃん、今、北海道のラウスという所にいるらしい。突然、葉書がきたんやて」

辰夫がハアハアと言いながら、転がる様に澄子の横にすべりこんできた。

「ほんま？ それで、何て書いてあったん」

「長い間、子供らがお世話になってすんません。今一人になって漁師の手伝いして暮します、やて」



「会いに来てくれるの」

勢いこんで、正座して澄子が聞くと

「知らん、それだけやと」

辰夫はぶすつと黙りこんだ。

澄子はすすきの穂、赤いぶなの葉、黄色のいちようを細かくちぎり、黒ごまも入れて万華鏡の華を作った。

クルクル、ゆっくり、赤白黄黒がまじりあい、クルルルと速く回すと、すばやく形を変えていき

赤のセーター、黒の背広、白い帽子、黄色のレインコートが風かざぐるま車の様に次々見えてきた。

―すれちがった地下鉄の人や―

澄子が息をとめて、黄色を見つめていると、シュツサワサワと形がくずれ、すすきの穂先がチリチリと揺れる絵文字になった。

辰夫は図書館に出かけ、尾白鷲のことを調べた。

―北海道、ラウスに流氷と共に三百羽ほど姿を見せる。水面近く浮き上がってきた魚を、大きく鋭い足の爪で巧みにとらえる。巨木の樹上か岩棚の上に巣を作る……か―

とメモをとりながら

―ラウス……？て、母ちゃんの住んでる所やないか―

ドキーンと胸が鳴る。

―四年も迎えにこない母ちゃん一体どうなってんのや―

今日も澄子はすすきのトンネルの中に座っている。

―母ちゃんをもう一度見たい―

万華鏡に新しいすすきのイガイガの穂、ぶなにいちようも入れ直し、そろそろと右に回してみた。

シャラ、シャラと小さな音がして見えてきたのは、三角の黄色のドロップ、赤いひなげし、筋の入った白い鳥の羽根がどこまでも連ながって、連ながっていて……それだけ。

左に回し直す。

―母ちゃん、出てきて―

速く動かす。角度も変える。

けれど模様は、ずっと同じまま。

フーと肩をすぼめて息をはき、万華鏡を膝に置こうとした時

―ス・ミ・コ―

どこからか、自分を呼ぶ声がした様で、澄子はキョロキョロ辺りを見回したが、誰もいない。

―スミコ―

今度は、もう少しはつきり聞こえた。

ちよつとうす気味悪くなった時、万華鏡がかすかに動いた。

―スミチヤン―

大きな声に 澄子は慌てて万華鏡を覗いた。

「あつ、母ちゃん」

黄色のコートを着た母ちゃんが、中でかすかに笑っていた。

「ごめんね、すぐく長い間ほったらかしにしておいて」

母ちゃんは目を伏せた。

「ワぁー」

澄子は泣き出し

「母ちゃん、母ちゃん母ちゃん」

涙が覗き穴のまわりを濡らすほど、どっと溢れた。

「大きくなって…：すまんかったね。かんにんしてね。許してもらわれへんね。こんなひ

どい事したんやもの」

母ちゃんも体中ふるわせている。髪に白髪が混じっている。

「私もそこに行きたい。万華鏡の中に入りたい」

澄子がかすれた声で言うと、母ちゃんはようやく落ち着いて

「このすすきのトンネルで『華、華、マーワレ、マワレ』と言って、三度回しながら私に会いたいと願ってくれたら、母ちゃんが見えてくる筈。今はこれで辛抱してね。あつ、千恵子先生の呼ぶ声が聞こえてきた。もう 学園へお帰り」

と慌てて言うと、万華鏡の中の母ちゃんは消え、辰夫は元気？ という声を残して、もやもやと元の模様にもどってしまった。

晩ごはんの後、澄子は辰夫を誰もいない談話室に引っぱっていった。

夕方、万華鏡の中の母ちゃんと話したこと、兄ちゃん、元気？ と聞いた事を言う  
と嘘付け、お前、万華鏡の見すぎで、目―おかしなつたんと違うか」  
と辰夫はあきれ顔。

「ほんまの事や。『華々マーワレマワレ』って三度言うて、母ちゃんに会いたって思っ  
たらね。母ちゃんの姿が兄ちゃんにも見えるねん。ねえ、ねえ、明日、すすきのトンネルに  
私と一緒にいこう」

澄子のきらきら光り、まっすぐに見つめる目の必死さに、ついに辰夫も

「よっしゃ、わかったわかった、行くから」

と眉根を少し寄せて言った。

あくる日、すすきのトンネルの中。

辰夫はめんどくさそうに、澄子の言う通りに万華鏡を手に、魔法の言葉を口にした。

「華・華・マーワレ・マワレ」

一回・二回・三回 万華鏡をまわし、穴の中をじっと見つめる。

「兄ちゃん、母ちゃんに会いたいと本気で思っ」

澄子にささやかれ、辰夫は膝を正し、息を止めて下腹に力を込めた。

すると、星が手をつないだ様な模様がゆらゆらゆれて、人の姿が見えてきた。

―あ、あーっ、母ちゃん……―

黄色のコートの母ちゃんだ。

辰夫は母ちゃんと目があい、頭がクラクラし、体中が熱くなり、手がワナワナ震える。

「辰夫、辰夫やね。澄子の事、よう面倒見てやってくれたね。母ちゃん、どれだけお礼と  
詫びを言うたらええか……」

母ちゃんの頬を幾筋も涙がツツツとこぼれた。

言いたい事が一杯あるのに、心は溶岩が燃えている様に、グツグツしてるのに、口がき  
けずにいる辰夫。

母ちゃんは瞬きもしないで見ている。涙があごまで伝わっている。風がすすきを揺らし、  
白い音がする。空気が青くなってゆらめく。

「辰夫、今一番したい事は何？」

沈黙の後、母ちゃんがぐもった声で、やっと話した。

「山尾動物園の尾白鷺を見にいきたい」

ぶっきらぼうに、どもりながら辰夫は答え額をこする。

「えっ、北海道の天然記念物の尾白鷺？」

母ちゃんの声が少し高くなった。

「その鷺、凄く大きい？ 右翼の羽根傷ついてない？」

辰夫は目を丸くして、大きく頷く。

「二年前、ラウスの漁師仲間が『タイガ』と呼んでた大きい尾白鷺が、流水にはさまれて大怪我をしたんよ。獣医さんが手当をしたけど、自然にもどすには厳しいと言いはって、どこかの動物園にもらわれていったと聞いた。入院中、私が見えさの魚運んで、世話を手伝ってたんやけど」

母ちゃんの息づかいが荒くなっている。

「おっ！ あいつの事かもしれない。いや、きっとそうや」

辰夫は早口で

「それでか、いつも高く遠い空を見上げてるのは、ラウスが恋しかったんや。やっぱり自分の本当の世界へ帰りたいたいんや」

辰夫の顔が朱をさした様になった。

「辰夫、今度動物園へ行く時、万華鏡を持って行って、母ちゃんとタイガを会わせて」

「うん。自由研究であの鷺を観察したいって先生に言うてるから、冬休みになったらすぐ行ける」

「私も私も」

と澄子が背中をつつくと、わかってるわかってると辰夫は澄子の頭を撫でた。

母ちゃんはつらそうに、今迄の事をとつとつと話した。

北海道で淳と一緒に暮らしていたこと、今は一人になって大自然の中、全く新しい生活を始めていること。一日も早くあんだ達を引き取りたいと思っている事を。

いつの間にか雲が出てきて、太陽が隠れ、万華鏡の世界は灰色がかった青紫の夕暮色に変わり始めた。

母ちゃんの顔もすすぎごしに見る様にチラチラして、かすんできた。

「今日はもう無理やね。辰夫、澄子、又ね」

母ちゃんは初めてやわらかい半泣きの笑顔を見せバイバイと手を振り……かげろうの様に消えていった。

十二月二十日、カーンと晴れ渡った午後、園長先生に連れられて、辰夫と澄子は三人の仲間と動物園にやってきた。

「わたしはペンギン観察希望者と一緒にここにいる。辰夫君、澄ちゃんは鷺を見に行くん

やな。一時間経ったら入口で待ち合わせしようね」

先生の許可が出たので、二人は一目散に猛獣類の檻へと走る。

見物人は誰もいない。

辰夫が

「タイガ、お前はタイガやな」と大声で呼びかけると、真中の太い枝に止まっていた大きな尾白鷺はガバツと羽根を広げた。

二mもある長さ。

「こっちへ来い、タイガ」

澄子が言うと、二、三度ワツサワツサと翼を動かし飛んできて、目の前の金網を鋭い鉤爪でつかんだ。

羽根を少しすぼめ、頭と嘴を網に近づけようとする。白い尾がピンと伸びた。

「タイガ、俺らの母ちゃん、知ってるやろ」

辰夫は精一杯伸びをして、「華々マーワレマワレ」ととなえ万華鏡を鷺に向けた。

厳しく澄んだ目で鷺は万華鏡を見ようと、頭を上下左右に小さくキクキクと揺った。

と、辰夫の右手の中の万華鏡がフルフル動き、あたり一面、うす紫がかったミルク色の靄モヤがたちこめてきた。

「タイガ、やっぱりお前やったね」

ふいに母ちゃんの声が聞こえた。

すると鷺はカツ、カツと鋭く鳴き

「そうかそうか、タイガ、ラウスへ帰りたいのか。わかった。一緒に行こう。おいで」

母ちゃんの声が大きく響いた。

尾白鷺は檻をつかんだまま大きく羽ばたき、先っぽの黒い羽根が七本ずつに分かれた。

クワツクワツ、カツカ、カー

長くのぼして鳴くと金網を離して宙に浮き、羽根を逆ハの字に広げた。

急に靄の紫に緑色がまじり、辰夫も澄子もまわりが何にも見えなくなった。

「兄ちゃん、どこにいてるの」

澄子の不安そうな声に

「澄子、ここやここや」

辰夫は左手を伸ばし、澄子の手を探して握った。

その時、右手でさし上げていた万華鏡にズシンと重みがかかり、激しく動いた。

辰夫はバランスを崩し、澄子と手をつないだまま尻餅をついた。

「ウワァー、兄ちゃん、母ちゃん」

澄子が泣き出す。

しばらくして、あたりの靄が少しずつ薄くなり、太陽の輝く青空が現われた。眩しいので目をこすって檻を見た辰夫はポカーンとした顔。

「いない。タイガがいない」

つがいの二羽がいるだけ。

辰夫は急いで万華鏡の中を覗いた。

ぼんやりとうす赤い光の中に、小さくなったタイガはいた。羽根をたたんで、母ちゃんの横に寄り添っている。

「母ちゃん」

「タイガ」

「これは何？夢？」

二人は奪う様に万華鏡を覗き、息を殺して言った。

――一足先に、タイガをラウスに連れて帰るね。あんた達も、もうすぐ迎えに行くからね――  
母ちゃんは黄色のコートの襟を直し、はにかんだ。

親子連れが檻の近く迄やってきた。

辰夫は万華鏡をリュックにすばやく入れ、二羽の鷺だけになった檻をもう一度振り返った。

辰夫と澄子は寒くても陽のさす日には、すすきのトンネルに出かける。

すすきは大分枯れ、穂はまばらで、茎もくすんだ茶色になっている。

「華々マーワレマワレ」母ちゃんを呼び出した辰夫は勢いこんで

「母ちゃん、タイガ 元気にしてる」

「元気やよ。ラウスの漁師から余ったスケトウダラをたっぷりもらって、大空を翼一ぱい広げて飛び回っている。白い矢羽根をピンと張り、黄色の嘴と足がきらめいててね。かっこいいんだよ。やっぱりタイガは空の王様や。そのうち流水がやってきて仲間も増える」  
辰夫と澄子の心はラウス、青空、尾白鷺に飛び、母ちゃんと暮らせる日が近い事を願った。

年が明けて 一月七日の七草粥の日。

千恵子先生がにこにここと辰夫と澄子の食卓にやって来て、ヒラヒラ葉書を振り

「お母さんから。近々学園に伺いますって」

渡された葉書は、魚と潮のにおいがした。

澄子は嬉しくなつて、お粥をもう一杯おかわりした。

小正月の十五日。

縄飾りやお札を持って、学園全員で千恵子先生の実家の神社に行く。毎年、七・五・三の日に子供達はおはらいを受けに行つていて楽しみの場所だ。

「神社の奥に祭られた火から移した『とんどの火』で焼いて、昨年一年の災いを消し去るんや」

園長先生は日本の古くからの慣わしを子供達に教えてきた。

神社の境内の横に大きな空地があつて、井型に組まれた竹が二mほどの四角錐になり、底から炎と煙が勢い良く上っている。

世話人が、持ち寄られた正月の名残りの品品を火中に放りこむと、バリバリと音がし、火勢が増した。

「ワアーすげえー」

子供達は離れた所をかたまつて、燃えさかる火柱に見とれている。

黄橙赤の火は、風が吹くと煤を澄子達の上にも飛ばした。

辰夫は、火のめざす空の高みを眺めてつぶやいた。

—この空はラウスの空とつながっているんやなあ—

大きな風が吹いてきて、盛んにわいていた煙がゆるゆると動き……鳥の形になった。

—あつ、鷲が飛んでるみたい—

辰夫が言うのと、澄子は急いで万華鏡をポシエツトからだして、「華々マーワレマワレ」とつぶやきながら覗き穴を「とんど」にむけた。

「母ちゃん、見える？」

澄子がささやくと、万華鏡はコトコトと動き

「すごいすごい、火がぼうぼうと燃えてる。まぶしいお日さんにだかれているみたいや。

ラウスの氷や海は、きりつと気持をひきしめるけど。あれ、タイガそっくりに煙がかたまつてる」

母ちゃんが素頓狂な声をあげた。

けれど、すぐに煙の鷲は羽根を動かす様に空気を蹴ちらかす様に動いて、だんだん横一文字になびいていた。

さきほどから、千恵子先生は辰夫と澄子の様子をにこにこ見ていた。

―あの子ら、この頃何やら嬉しそやね。澄ちゃん、今日も万華鏡持ってきてるな―  
先生は久し振りの実家なので、うきうきとしていた。

上気した顔で全員が帰りの地下鉄に乗り込んだ。

辰夫と澄子は、いつも立つドアの前にびったりとひつついて、何も見えない外を見ている。

「だんだん、ラウスへ行く日が近づいてる気せーへん？ 兄ちゃん」

左右にゆられながら、澄子が辰夫の横顔に話しかけた。

「そやな、煙までタイガに見えるもんなあ」

辰夫は暗闇に目をこらしたまま答え、急に聞き耳をたてた。

ゴトン、ゴトンの音にかぶさる様に、遠くから コトンコトンコトンと響きの違う音が聞こえてきた。

「すれ違いの地下鉄や」

澄子は万華鏡を力一杯握りしめた。

「母ちゃん、ずっと前、あの電車に乗ってたのと違う？」

「そのはずや」

二人は頬と鼻をガラスに押しつけて闇を見ていると

違う路線の電車の窓が四つ、上下に揺れながら浮かびあがった。

赤のセーター、黒の背広、白いベレー帽の飾り窓が見えるのに、次の窓に黄色のコートはない。

「母ちゃん、この万華鏡の中にいるから、あの列車にはいないのや」

はつとした辰夫が、「華々マーワレマワレ」と早口で言っ

「母ちゃん」

と万華鏡を覗こうとした時

―辰夫、澄子、今や。母ちゃんと一緒においで。今、擦れ違う電車の窓が万華鏡に乗り換える入口。さあ、手足の力を抜いて、目を閉じて、華、華マーワレ、マワレ―

母ちゃんの声が反響する様に、じぐざぐに聞こえた。

その声に引きこまれるように目を閉じた二人は、ぐあーんと浮き上がり、色紙やビーズの漂う闇を回りながら通りぬけ……

どしんと尻餅をついた。

「ウヒャ」



「キヤアー」

シヨックで目を開いた二人は、赤のセーター、黒の背広、白いベレー帽の人達にかこまれている。

うす紫にけむる地下鉄の座席に、二人は座っていた。

―やっと子供達きたね―

赤黒白の三人は母ちゃんに笑いかけ、口々に言った。

母ちゃんはキヨロキヨロする二人を、右と左の腕にしっかり抱きしめている。

学園の仲間達の乗った電車は、もう見えない。

ラウス行き万華鏡列車は、ひたすら走り続ける。

その後、丁寧な手紙が、希望学園、なかよし、山尾動物園に届いた。

「黙って辰夫と澄子と尾白鷺をラウスへ連れてきてしまいました。深くおわびします。秋子」

辰夫と澄子が書き添えてた。

「園長先生、千恵子先生、冴子先生ごめんなさい。長い間ありがとうございました。写真が添えられていた。」

青空を悠々と飛ぶ一羽の尾白鷺を遠景に、母ちゃん、辰夫、澄子が笑っている。